

内向き志向

北海道生産性本部の調査によると、今年の道内の新入社員は内向き志向が強いという結果が出たそうです。

例えば、「海外勤務に応じるかどうか」を聞いたところ、43.2%の方が応じるとしています。56.8%と6割近くの方は応じる考えがないとしています。同じ質問について道外では、応じるが62.2%、応じないが37.8%と、北海道と全く逆になっています。

若者の内向き志向というのは、特に北海道の若者達だけの傾向というわけではありませんが、道外の新入社員と比較すると、そうした傾向がより強く出てきているということだと思えます。

調査結果では、この他に「残業が少なく自分の時間が持てる職場を好むかどうか」を聞いたところ、73.2%がそう思うと応えており、これは過去最高の数値だったそうです。同じ質問について道外では52.4%という結果だったそうですから、この点でも大きな差が出ています。これは、北海道の若者達が、仕事と同時に自分の時間も大切にしようという「ワークライフバランス」の発想に立っているのであれば時代を先取りしているともいえますが、仕事より趣味などに時間を使いたいということだと、少し寂しい気がします。

働き方の面でも、58.0%の方がスペシャリストよりもジェネラリストの方を選択するとしています。その理由は良く分かりませんが、ジェネラリストの方がつぶしがきくと考えているのかも知れません。

更に、「仕事を通じてかなえたい夢がある」かを聞いたところ、あると応えた方が64.8%で、これは過去最低だったそうです。

もともと北海道の若者達は、就職するなら道内で、また、親元に近いところでといったように、開拓者精神とは正反対の内向き志向が強い傾向にありました。こうした中、厳しい就職戦線を勝ち抜いてようやく就職できたのですから、安定志向が一層強くなるのは致し方ないともいえます。とはいえ、できるだけ無理をせず、責任も軽く、楽な仕事をしたい、しかも給料は少しでも高くいただきたいというのは、いささか虫が良すぎます。

仕事に就くということは、生活の糧を得るということに止まらず、仕事を通して社会に参加し、貢献していく、更には自己を実現していくということでもあります。それは、人の生き方そのものでもあるわけですから、教育においても、子どもたちの発達段階に応じて、働くということの意味、職業観や勤労観についてしっかりと考えさせ、指導していくことが重要です。(塾頭 吉田 洋一)